

# くまがやの

# 板碑

No. 1

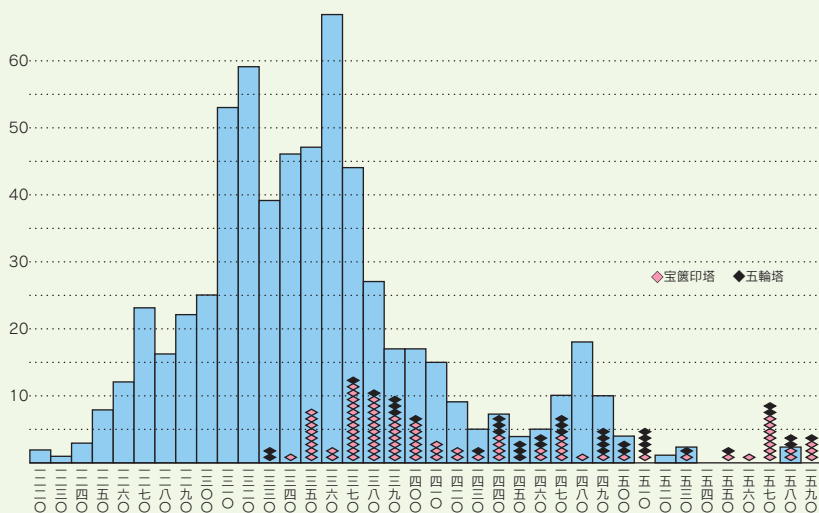
## ◆板碑の誕生と展開

板碑は浄土信仰の高まりを背景に中世初期に誕生した供養塔婆で、関東地方では緑泥石片岩を使用することから武蔵形板碑、あるいは板石塔婆とも呼ばれる。板碑の形は板状の石材の頭部を三角形に造り、一面に主尊と銘文を刻むことで一定の形を成している。この形は中世を通じて変わらず、埼玉県では三万基に及ぶ造立があった。

市域の江南地区には初期の板碑が所在すること



「餓鬼草子」に見える塚と板碑状の卒塔婆



旧大里郡内の板碑と他の中世石造物の造立推移

から、板碑発祥の地と考えられている。妻沼地区には特徴的な阿弥陀三尊像板碑が分布するなど地域性も見られる。当時、板碑を造立した社会的地位の高い人には、領主、僧侶などが居り、とくに

## 熊谷の板碑

板碑の造られた中世の熊谷市域は利根川・荒川の沃野と高燥な台地・林地域が広がり、土豪的有力者が各地に力を蓄え、血族類縁による武士団を結成し、多くは苗字を名乗り土着していた。

平氏・源氏の武士政権の確立に、その武力を發揮したことは、保元・平治の乱、寿永・治承の乱に、現在の熊谷地域の出身、あるいは縁を持つ多くの武蔵武士が登場している。「保元・平治物語」・「平家物語」・「吾妻鏡」等の記録には、畠山氏、岩松氏、中条氏、久下氏、別府氏、熊谷氏、斎藤氏などがみえ、その館跡や建立寺院などに多くの板碑が残されている。さらに、鎌倉幕府滅亡から室町幕府の成立の背後にも「太平記」にみえる多くの武蔵武士が、あるいは滅亡し、あるいは新たな本拠を求めて各地へ移転していった。

埼玉県(昭和五六年)が行った板碑調査では県内二〇、二〇一基、熊谷市域では八六七基が確認された。現在でも、工事や遺跡調査による新たな発見が累積されており、市域の板碑数も倍増するものと予想される。

市内の板碑には次の特徴がある。①板碑発祥の地であること、②造立者の明らかな板碑がある(別府氏)。③地域限定の板碑が造られた(善光寺式阿弥陀三尊画像の板碑など)。④南北朝期に造立の最盛期がみられる。

# 市内の代表的な板碑

① 嘉禄三年（一二二七） 銘板碑（市立江南文化財センター）



阿弥陀三尊  
在銘日本最古

③ 寛喜二年（一二三〇） 銘板碑（市立江南文化財センター）



阿弥陀三尊  
在銘日本三位

⑤ 鎌倉期（妻沼 歓喜院）



⑦ 鎌倉期（中条 常光院）



② 安貞二年（一二二八） 銘板碑（樋春 真光寺）



阿弥陀三尊  
在銘日本二位

④ 鎌倉期（中条 えんま堂）



五輪塔の彫刻

⑥ 室町期（佐谷田 永福寺）「南無阿弥陀仏」の名号



⑧ 嘉慶二年（一二三八） 銘板碑（池上 中の寺）



天蓋などの装飾がある

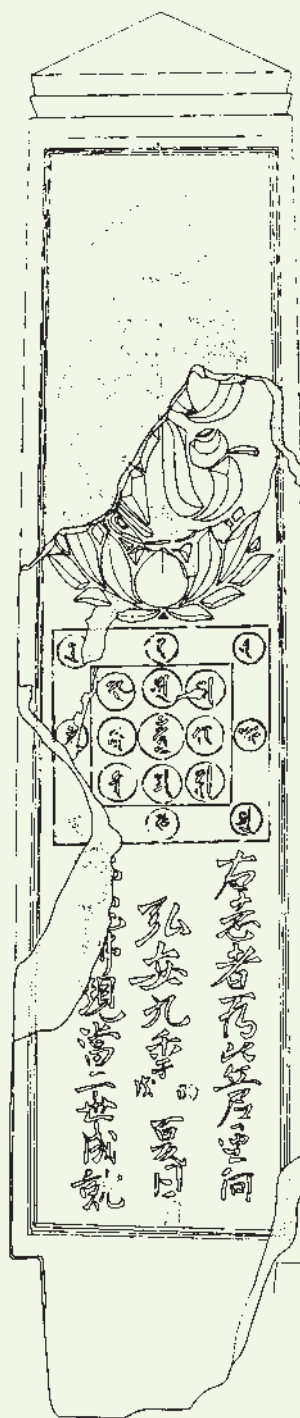
※見学の際にはマナーをお守り下さい。

鎌倉時代の市内板碑  
(造立順50基)

No.	所在地	紀年銘	西 暦	種 類
1	須 賀 広	嘉禄3年	1227	阿弥陀三尊
2	樋 春	安貞2年	1228	阿弥陀一尊
3	小 江 川	寛喜2年	1230	阿弥陀三尊
4	西 別 府	寛元2年	1244	阿弥陀一尊
5	中 奈 良	建長1年	1249	阿弥陀一尊
6	池 上	建長3年	1251	阿弥陀一尊
7	上 須 戸	建長8年	1256	胎藏界大日
8	妻 沼	康元1年	1256	阿弥陀三尊
9	肥 塚	康元2年	1257	阿弥陀一尊
10	万 吉	康元2年	1257	阿弥陀一尊
11	西 野	正嘉1年	1257	
12	押 切	正嘉2年	1258	虚空蔵
13	押 切	正嘉2年	1258	阿弥陀一尊
14	妻 沼	正嘉2年	1258	阿弥陀一尊
15	妻 沼	正元2年	1260	阿弥陀一尊
16	東 別 府	正元	1260	阿弥陀一尊
17	押 切	弘長3年	1263	阿弥陀一尊
18	池 上	弘長4年	1264	阿弥陀一尊
19	台	文永2年	1265	阿弥陀一尊
20	成 沢	文永4年	1267	阿弥陀一尊
21	上 之	文永4年	1267	阿弥陀一尊
22	桜 木 町	文永4年	1267	阿弥陀一尊
23	妻 沼	文永8年	1271	
24	市 教 委	文永8年	1271	
25	中 奈 良	文永9年	1272	
26	村 岡	文永10年	1273	阿弥陀三尊
27	三 本	文永11年	1274	阿弥陀一尊
28	妻 沼	文永11年	1274	阿弥陀一尊
29	日 向	文 永	1275	阿弥陀一尊
30	万 吉	文 永	1275	阿弥陀一尊
31	間々 田	健治2年	1276	阿弥陀一尊
32	西 城	健治3年	1277	阿弥陀一尊
33	楊 井	建治3年	1277	
34	弥 藤 吾	弘安1年	1278	阿弥陀一尊
35	石 原	弘安2年	1278	阿弥陀三尊
36	上 中 条	弘安1年	1278	阿弥陀三尊力
37	日 向	建 治	1278	阿弥陀一尊
38	玉ノ井	弘安2年	1279	阿弥陀一尊
39	下三ヶ尻	弘安2年	1279	阿弥陀一尊
40	妻 沼	弘安4年	1281	阿弥陀三尊
41	成 沢	弘安4年	1281	阿弥陀一尊
42	西 別 府	弘安5年	1282	
43	上 之	弘安6年	1283	
44	成 沢	弘安7年	1284	阿弥陀一尊
45	宮 本 町	弘安7年	1284	阿弥陀三尊
46	小 江 川	弘安9年	1286	阿弥陀一尊
47	箱 田	弘安9年	1286	
48	妻 沼	正応1年	1288	阿弥陀一尊
49	御正新田	正応1年	1288	阿弥陀三尊
50	宮 本 町	正応1年	1288	阿弥陀一尊



⑩ 文永十年 (一二七三) 銘板碑 (村岡 茶臼塚)



⑨ 弘安九年 (一二八六) 銘板碑 (市立江南文化財センター)

板碑を見学できる主な場所

- ・熊谷市立江南文化財センター
- ・熊谷市立図書館
- ・別府 香林寺
- ・別府 安楽寺
- ・押切 寶幢寺
- ・永井太田 能護寺
- ・中条 常光院
- ・樋春 真光寺
- ・玉井 玉井寺
- ・妻沼 実盛塚
- ・池上 中の寺
- ・中奈良 国性寺

## 市内の代表的な板碑

市内の代表的な板碑の銘文と概要 ①「諸教諸讚 多在弥陀 故以西方 而為一准」、③「若有重業障 無生淨土因 乘弥陀願力 必生安樂国」、⑩「一念弥陀仏 即滅無量罪 現受無比業 後生清淨土」などは經典などの詩句から採った言葉で、いずれも阿弥陀如来を信奉することで極樂淨土へ再生できると述べています。②「右造立旨趣者 為幽儀成仏 得道所奉訪也」、⑨「右志者為比丘 尼聖阿 弥陀仏現當二世成就」、⑩「右志者為過去慈父幽靈成仏得道 兼現在悲母現當二世悉圓滿也」では、造立の直接の動機や目的として、自身の供養や父母の成仏や現世での安樂を願うことが示されています。⑩では造立者が九人の子供です。なお、⑩は市内最大です。⑧にみえる「逆修」の文字は生前に自身の供養を行ったとの意味です。①・③・⑤・⑦は阿弥陀三尊の仏像の姿を彫出しています。②・⑧・⑨・⑩は阿弥陀如来の種子（阿弥陀を表す梵字）が彫られています。⑥は文字を、⑨は種子と共に曼荼羅の一部を現しています。

## 板碑の源流

仏教教義では、三宝（仏・法・僧）の建立、法・經典誦誦、僧・喜捨を尊重することで功德を得られるとされていますが、平安時代末から仏法の衰勢する末法の世へ入ると考えられ、社会不安



が高まり来世安穩を希求する信仰が高まりました。とくに、武士政権の誕生や源平合戦に巻き込まれた武士や庶民まで、極樂往生を強く願う阿弥陀如来にすがる浄土思想が、広範の人々の心を捉えたようです。ここに簡易な造塔により現世・来世を供養する方法として浄土信仰の中に板碑発生の起源があったと思われます。

平安時代末に描かれた「地獄草子」・「餓鬼草子」などには野辺に晒される遺体や墓地の様子（背景図）が、たぶん日常の風景のまま写生され、路頭に建つ供養塔に礼拝する人々の姿（下図）も描かれています。この仏像の描かれた塔婆（六角木幢・木製板碑）などの木製品は、板碑に類する供養塔婆で、その実物が当時の遺跡から発見され始めています。

## 板碑の盛衰

最初の板碑は熊谷市須賀広に所在した嘉祿三年銘板碑です。前述した板碑の特徴を兼ね備え、日本最古の板碑として八十年以前に発見されました。以降、鎌倉時代中期までの板碑を、初発期とし、鎌倉末から南北朝期を挟んだ室町時代前半までに造立の最盛期を迎え、大型品や精美を尽くした優品が作られています。表中は板碑のほか造られた五輪塔・宝篋印塔を含めた石造物の年代分布も表していますが、室町時代中ごろより、板碑の造立に替わってこれらの石造物が造られていきます。武蔵国だけで三万基造られたとされる板碑も室町時代末には全く消滅し、近世期の寺請制度のもと一家類縁の墓石が造立されていきます。



**挿絵の説明** 上—塚上に建つ塔婆 中央は阿弥陀三尊画像が描かれ、左右に板碑状の塔婆が建つ。下—寺院の門前と思われる大路に建つ供養塔（四面幢）の上部に阿弥陀三尊画像が描かれている。塔辺りには人間には見えない餓鬼の姿も描かれている。「地獄草子絵巻」より作画